

学ば力の差をつくる日本語能力

ー人生 100 年時代、日本語能力を評価し、育むための「日本語検定」への期待ー

特定非営利活動法人学習分析学会 副理事長
特定非営利活動法人日本語検定委員会 審議委員
堤 宇一

古来、時の権力者のみに許され、追い求めた「不老不死」(長寿)を、今や誰でもそれを手にすることができる、人生 100 年時代の到来である。この長寿をもたらしたのは、人類の英知「科学技術」に他ならない。科学技術は難病の駆逐、健康という恵と同時に、世界を加速させ続けた結果、予測不能な激変を常態化した。VUCA(※1)の時代である。昨今、予想できない未来に、長寿人生を迎えるストレスや問題点を取り上げた特集(※2)を経済雑誌が組むほどである。

変化の激しい長寿人生を乗り切るには、3つの見えない資産「生産性資産」(※3)「活力資産」(※4)「変身資産」(※5)が重要であるといわれる(※6)。中でも「生産性資産」は、学習によって形成される資産である。変化を前向きに捉え、柔軟性を持ち、開かれた姿勢で新しいスキルと専門技能を学習によって獲得し続けていく。変化の激しい、人生 100 年時代は、まぎれもなく生涯学習の時代でもある。

筆者は会社員人生のほとんどを産業人教育業界で過ごし、その多くを研修開発や研修効果の測定という領域を専門としてきた。企業での教育(研修など)は、商品知識や業務知識、業務手続きの理解等に代表される業務遂行力

の強化や設備機器の操作技能、パソコン操作スキル、ソフトウェアの使い方等に代表される業務機器の操作方法の習得だけでない。むしろ「役割認識」(※7)「思考力の強化」(※8)「意識変容」(※9)を目的に実施される場合の方が多。業務知識や業務スキルの強化を狙った場合、その効果の測定方法は比較的容易で、知識の理解度確認や実機操作の習熟具合を確認して判断する。

測定の難易度が高く、期待通りの効果を得られたかどうかの見極めが難しいのが「役割認識」や「意識変容」を目的に実施された研修である。意志や思い、感情等の変化とその変化が目指す方向性を確認しなければならない。その際に用いる方法の一つが小論文作成である。これは、研修受講によって生じた気持ちの変化や無意識に発動される価値観や考え方、教訓などを学習者自身の言葉で文章に整理させ、その記述内容から気持ちや意識の変化状態を捉えようとしている。

小論文に目を通すと、自身の心情を正確に他者が理解できる程度に表現できない大人たち(企業の従業員)が多いことに驚ろかされる。「普段接しない方々と意見交換でき良かった」「この内容は上司に受けさせたい」といった表層的感想、「○○理論はとても参考になった。職場でも活用できる」といった世辞の類や趣

旨不明な文章がつづられる場合も少なくない。研修はまずかったのか、良かったのか判断さえつかない。彼らが過ごした時間にどんな意味があったのか、普段の業務や職場の中でどのようなコミュニケーションが交わされているのかを考えると暗澹たる気持ちになる。この現象は、新入社員だけのことではない。昨今では、部下を率い、それなりの規模の事業責任を持つ管理職や候補者たちにも、その傾向が見てとれる。

人は言葉で勇気づけられ、癒される。人は言葉で思考し、理解する。母語である日本語を正しく使えるレベルに鍛えられていない状態では、人間関係も思考も深めることができない。また、文章にまとめる行為は思考のスピードを緩め、自身の考えを明確にし、何年経っても忘れない長期記憶（※10）への定着を促す。しかし、このようなふり返りから、

一体何が長期記憶に貯蔵されてしまうのだろうか。

語彙が乏しく、自分の思いを表現する力が十分に開発されていない者は、学習を上手にできない。この足枷は、「生涯学習によって激変する長寿化時代に対応する」という生き残りの手札が使えないことを意味する。学ぶ力は、日本語能力が十分に育まれてこそ、適切に機能する。適切に情報を理解し、自身の思いを正確に表現できる能力によって学習を効率的に実施できる。上手に学習を進められるからこそ、学習に面白味をおぼえ、分かることの痛快さを味わえる。そのことが、生涯学習へのモチベーションとなる。

人生100年時代、日本語能力を評価し、育むための「日本語検定」への期待はこのほか大きい。

- ※1 VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑）Ambiguity（曖昧性）という4つのキーワードの頭文字から取った言葉である。現代のカオス化した経済環境を指し「予測不能な状態」を意味する
- ※2 「長生きという憂鬱 人生100年時代の正しい老後設計」日経ビジネス 2020年2月号
- ※3 生産性資産とは、人が生産性を高めて成功し、所得を増やすための要素を指す。具体的には、スキルや知識が主たる構成要素になる。（ライフシフト p127）
- ※4 活力資産とは、肉体的・精神的な健康と幸福のこと。健康、友人関係、パートナーやその他家族との良好な関係などが該当する。（ライフシフト p127）
- ※5 変身資産とは、大きな変化を経験し、多くの変身を遂げるために必要な資産のこと。自分についてよく知っていること、多様性に富んだ人的ネットワークを持っていること、新しい経験に対して開かれた姿勢を持っていることなどが含まれる。（ライフシフト p127）
- ※6 リンダ・グラットン&アンドリュー・スコット著「ライフシフト」東洋経済新報社 2016年
- ※7 役割認識とは、業務内容や組織的ポジションや上位職からの暗黙の期待等を鑑み、業務遂行で意識すべき心構えや相応しい立ち居振る舞いを促す自覚のこと。日本企業の多くは、職務分掌を明確な文章にして従業員個々に伝えていない。そのため、研修などを通じて職務やその立場に求められる役割ならびに役割意識を自覚させる。
- ※8 思考力とは、組織や業務の中で発生する不具合の改善や問題を解決する際に、どう取り組むのかを考える力を指す。具体的には、問題を発生させている様々な原因を見つけ出す、問題発生の主要原因を特定する、原因を取り除くための対策を打つという全工程で用いる考える力である。その思考力を高めるための研修テーマとして「論理的思考力」「批判的思考力」「水平的思考力」「デザイン思考力」などが有名である。
- ※9 意識変容とは、批判的な振り返り（自分の信念、態度、捉え方等々の背後にある前提を認識し、それらが妥当かどうかを評価すること）を通じて、意味パースペクティブ（人がものごとを判断する際に用いる枠組みで、文化、社会、学習、人間関係などによって形成される）が変化することである（メジロー 1990）。企業では、社会や技術、規制等の変化に伴い急速に様変わりする価値観や行動規範などを理解させ、時代に即した振る舞いがとれるように研修などを通じて従業員の意識の変容を促している。
- ※10 長期記憶（long-term memory, LTM）とは、記憶の二重貯蔵モデルにおいて提唱された記憶区分の一つであり、大容量の情報を保持する貯蔵システムである。

堤 宇一 (つつみ ういち)

プロフィール

「教育効果測定」を2000年より専門テーマとして研究を開始。教育効果測定での米国の第一人者である Jack Phillips 博士が主催する ROI Network (後に ASTD との事業提携により ASTD ROI Network に名称改名) にて、アドバイザーコミッティボードを2期 (2001～2004年) 務める。(株) 豊田自動織機で行なった「SQC 問題解決コースの教育効果測定プロジェクト (2002)」は、アジア初の事例として In Action, Implementing Training Scorecards (ASTD) に掲載される。現在、教育効果測定やインストラクショナルデザインに関するコンサルタントとしてコンサルテーション、講演、執筆等の活動を、産業人教育の品質向上を目指し行なう。2020年度から、当法人の審議委員に就任。



著書

- 「はじめての教育効果測定 教育研修の質を高めるために」 堤宇一編著 日科技連出版社 2007年
「教育効果測定の実践 企業の実例をひも解く」 堤宇一編著 日科技連出版社 2012年
「越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ」 堤宇一共著 新曜社 2015年

